

『今鏡』の叙述態度

——伝聞表現に着目して——

陳 文 瑤

はじめに

『今鏡』序文では聞き手の

「1昔の風も吹き伝へ給ふらむ。しかるべき言の葉をも伝へ給へ」
へ
「序」(上・十六頁)

という要請に対して、語り手の老嫗は最初婉曲的に断つたが、聞き手の再度の懇望で

「2近き世の事もおのづから伝へ聞き侍れば、おろおろ年の積りに申し侍らむ。
「序」(上・十七頁)

と、語り始めた。傍線部「近き世の事もおのづから伝へ聞」くところのように、その語りの内容は伝聞してきたことによると自ら表明している。確かに『今鏡』の文体には、伝聞表現の性格が顕著に見られ、作品の終盤に至ってもその性格は変わらない。

「3」今の世のことは、人にぞ問ひ奉るべきを、よしなきこと申し続け侍るになむ」などいへば、「さらば昔語りも、なほい

かなることか聞き給ひし。語り給へ」と言ふに、「おのづから聞き侍りしことも、ことこの続きにこそ思ひ出で侍れ。かつは聞き給へしことも確かにもおぼえ侍らす。伝へ承りしこと、思ひ出づるに從ひて申し侍りなむ。かたちこそ人の御覧じどころなくとも、いにしへの鏡とも、などかなり侍らざらむ」とて。

(むかしがたり第九「あしたづ」(下・三八四頁))

「3」は老嫗が昔語りを語り出すところの条である。序以降、聞き手に口を挟ませることなく語り続けてきた老嫗の語りがここで一段落し、再び聞き手が登場する。傍線部「おのづから聞き侍りしことも、ことこの続きにこそ思ひ出で侍れ。かつは聞き給へしことも確かにもおぼえ侍らす。伝へ承りしこと、思ひ出づるに從ひて申し侍りなむ」と、老嫗が聞き手の更なる語りの要請に対して、自らの語りを表明する。「聞き侍りし」「聞き給へし」「伝へ承りし」と老嫗が直接語っているように、語った事々は老嫗自身が聞いた情報か、人づてに聞いた情報なのである。序での老嫗と聞き手のやりとりを思い起こすと、その伝聞表現についての一貫性は誰もが領くことであろう。

なぜ、『今鏡』は老嫗の語りに徹底した伝聞表現を用いたのか。稿者はその答が、前述した『今鏡』の「伝承」を重んじる心にあると考えている。『今鏡』が「伝承」に対して熱い視線を注ぐことと、語られた内容を、既に前稿において論じてきた。本稿では、前稿で論じ残した伝聞表現の実態について探りたい。

一 〈伝へ聞く〉詩歌

はじめに、詩歌の引用場面に着目して伝聞表現の実態を探ってみる。「和歌」「漢詩」「連歌」の三つに分けて考察する。

1、和歌

まず、和歌を引用する際に伝聞表現を多用していることが注目される。

〔4〕法勝寺に渡らせ給ひて、花御覧じめぐりて、白河殿に渡らせ給ひて、大御遊ありて、上達部の座に御土器たびたびすめさせ給ひて、おのおの歌奉られ侍りける。序は花園の大臣ぞ書き給ひけるとなむ承りし。新院、御製など集に入り侍るとかや。女房の歌なむど、さまざまに侍りけりとぞきこえ侍りし。

万代のためしと見ゆる花の色をうつしとどめよ白河の水なむどぞ、詠まれ侍りけると聞き侍りし。御寺の花、雪の朝などのやうに、咲きつらなりたる上に、わざとかねて外のをも散らして、庭にしかれたりけるにや、牛の爪も隠れ、車のあとも入るほどに、花積もりたるに、こずゑの花も、雪、盛りに降るやうにぞ侍りけると、伝へ承りしだに、思ひやられ侍りき。まじりて見給へりけむ人こそ思ひやられ侍れ。

（すべらぎの中第二「白河の花の宴」(上・二二二―二二三頁)）

右記の「4」は最も典型的な例だと思われる。白河・鳥羽両院と待賢門院の三人は法勝寺での花見が終わった後、白河殿に渡御して、そ

こで大御遊が催された。その際に、「おのおの歌奉られ侍りける」というように和歌も詠まれている。傍線部①で示しているように、詠じられたこれらの歌の序を花園の大臣源有仁が書いたという。また、男性の歌に交えて、傍線部③女房たちの歌も様々に詠まれていたように、その代表として、待賢門院兵衛の「万代の…」歌が語られる。

①「となむ承りし」、②「とかや」、③「とぞきこえ侍りし」、④「と聞き侍りし」とあるように、和歌のみならず、序、参加メンバーなど、和歌が生成する歌会や遊宴などについても伝聞表現を使って叙述を進めている。さて、三院が花見をした法勝寺の光景についても、傍線部⑤「伝へ承りし」と語っているように、人づてに知りえたものであり、「…伝へ承りしだに、思ひやられ侍り。まして見給へりけむ人こそ思ひやられ侍れ。」と、伝えに聞いた法勝寺のすばらしい景色に思いを馳せ、実見した人の感動を思いやるのである。

〔5〕あさましき心のうちにも、すきずきしかりし人にて、平民の刑部卿といひし、その折何の守とか申しけむ、その歌とてつたへ聞き侍りし。

またも来む秋を待つべき七夕の別るるだにもいかが悲しきとかや。(すべらぎの中第二「釣りせぬ浦々」(上・一八一頁)）

〔5〕は白河院の崩御が語られている条である。院の死去を悼む歌が挙げられている。傍線部「その歌とてつたへ聞き侍りし…とかや」とあるように、「またも来む…」という歌を、平忠盛の歌として語り手の老嫗は伝え聞いたという。この歌は「七月七日白河院かくれさ

せたまひけるに、よめる」という詞書と共に、『後葉集』巻第十五・哀傷の部に収録されている。それ以外では、『今鏡』より時代が下る『玉葉和歌集』巻第十七・雑歌部に入集する。⁵⁵『後葉集』は『今鏡』作者とされる藤原為経の撰である。どこの誰經由でこの歌を聞いたのかを知ることは、資料上の制限もあるため、難しいであろうが、『今鏡』作者が独自の入手方法でこの歌を知ったことが想像できる。さて、同じ白河院の死去を哀悼する歌として、

『6』いづれのほどに誰か詠ませ給へりけるとかや

いかにして消にし秋の白露を連の上の玉と磨かむ

といふ歌を侍りけるとなむ。こまかにも聞き給はざりき。

（すべらぎの中第二「釣りせぬ浦々」(上・一八一頁)

『6』では「いかにして…」歌が挙げられている。この歌は『玉葉和歌集』巻第十七・雑歌部に詞書「白河院かくれさせ給ひにける秋よみ侍りける」とあり、「法性寺入道前関白太政大臣」(藤原忠通)の歌としている。が、『今鏡』と『玉葉和歌集』以外には、同歌が見当たらないので、真否を判断し難い。傍線部①「いづれのほどに誰か詠ませ給へりけるとかや」と語っているように、誰の歌かは不明なのである。傍線部②「こまかにも聞き給はざりき」とあるように、『5』の「またも来む」歌と違つて、「いかにして…」歌の詠者に関しては、老嫗は何の情報も手に入れていない。

和歌を記述する時に用いられる伝聞表現は枚挙に暇がないが、このように和歌そのもののみではなく、時にはその詠者、時には和歌

が行われた場、時にはその歌についての評価など、和歌をめぐる様々な事柄が、老嫗の(伝え聞き)によつて語られているのである。

2. 漢詩

これまで『今鏡』が和歌を叙述する際に、伝聞表現を多用する傾向について述べてきたが、和歌のほかには、漢詩や連歌などを語る時にも伝聞表現を多く用いると言える。

『今鏡』作者は、漢詩に対しても並み並みならぬ関心を抱いており、「むかしがたり第九」に「唐歌」という漢詩をめぐる話の一章段を設けるほどであった。

『7』いづれの秋にか侍りけむ、「菊の花星に似たり」といふ題の御製、唐の御言の葉きこえ侍りき。

司天記取葩稀色 分野望看露冷光

とか人の語り侍りし。御才もかしこくおはしましけるにや。

（すべらぎの上第一「子の日」(上・四四頁)

右記の『7』は後一条帝の漢詩の才について触れる条である。後一条帝が詠じた漢詩の一例として「司天…」詩を挙げる時に、「とか人の語り侍りし」と伝聞表現が用いられている。「いづれの秋にか」とあるように、この詩が詠じられた場を限定することはできないが、「人の語り侍りし」という「人」がその席上にいたことは推測できよう。

その「人」から老嫗はこの漢詩を聞いたのであろうか。また、漢詩のみではなく、漢詩の題、漢詩が詠じられた場など、漢詩をめぐる様々な事柄が他人から(伝承)されたことを、伝聞表現から知るこ

とができよう。次に挙げる後朱雀帝の漢詩を語る条では、

「8」詩なども、をかしく作らせ給ひけるとこそ聞き侍りしか。

「秋のかげいづち帰らむとす」となどいふことを、「路山水にあらざれば、誰か趁るにたへむ。跡乾坤にまかせたれば、尋ぬる事得むや」など作らせ給へりけるとこそ承りしか。乾坤といふは、天地といふことにぞ侍るなる。長元二年三月四日、花の宴させ給ひて、「歌のした」はうぐひすにしかず」とかいふふ題賜ひて、桂折る試みありときこえ侍りき。

（すべらぎの上第一「星合ひ」へ上・六七頁）

傍線部②「とこそ承りしか」とあるように「7」と同様に漢詩の引用については伝聞表現が用いられている。また、後朱雀帝の漢詩の才能については、傍線部①「とこそ聞き侍りしか」と伝聞表現を用いている。このように漢詩のみではなく、ある特定人物が詠じた漢詩についての評価も老嫗が（伝承）する形になる。傍線部③「乾坤といふは、天地といふことにぞ侍るなる。」と、挙げていた漢詩の語句について伝聞の形で説明を加えている。

「8」はA後朱雀帝が詠じた漢詩について、B長久二年に催された花の宴についてと二つの漢詩関連事項が語られている。傍線部④では花の宴という行事で詠まれた漢詩の題「歌のしたはうぐひすにしかず」とその形式「桂を折る試み」に關しても伝聞表現を使っている。このように、漢詩そのもの、漢詩に対する評価、漢詩句に加える説明、漢詩の題、漢詩が詠まれた状況など、漢詩とかがわる

話題はいずれも老嫗が受けた（伝承）によることになるのであると思われる。

3、連歌

『今鏡』に語られた連歌は全部で十一箇所、和歌や漢詩に比べ、それほど触れられていない印象を受けがちであるが、みこたち第八「花のあるじ」で語られる有仁家での御遊でよく作られた鎖連歌が最古の鎖連歌とされること、『今鏡』の連歌観を窺えることなどの点から、等閑視することはできない。そして『今鏡』で書かれている連歌にも、和歌・漢詩と同様に伝聞表現が用いられている。例えば、

「9」いづれの大臣家にかありけむ、男の忍びて局町に入り居りければ、前渡りする人ありて、傍の局に立ちとどまりて、「まゆみ、まゆみ」と忍びに呼びけれど、答へざりければ、うちにも、驚かすをとほのかにきこえけり。呼びかねて、過ぎざまに、いたくね入るはまゆみなりけり

と口ずさみければ、うちに、

やといひて引けどさらにぞ驚かぬ

と、一人ごちけるこそ、いとやさしくきこえけれ。「たれとも知らでやみにき。はなやかに言ひ交はず音はなくて、心にくかりし人かな」とぞ語りける。聞きける男は、盛家といひし人とかや。

（つちぎき第十「敷島の打聞」へ下・四九一頁）

「9」のように、局の前を通り過ぎた男と局の中にいる女との連歌のやり取りが語られている条では、傍線部で示したようにこのやり取

りを聞いていた盛家が話したという形を取っている。老嫗が盛家の話を聞いたのか、盛家の話を耳にした人から聞いたのか（と「とかや」という表現からは、伝え聞きと考えられよう）、いずれにしても、情報の発信者は盛家となっている。このように連歌をめぐる話も色々な情報源から（伝承）され、そして語られるのである。

すべらぎの中第二「玉章」では、堀河帝と源俊頼の連歌のやり取りを語ってから、老嫗の話はさらに「歌の風情いたづらに失する事なりとて、連歌は大方せられざりけりときこえ侍りに……」と、俊頼の連歌親にまで及んでいる。そして『俊頼髄脳』の例を挙げながら、「連歌をもうけぬこと、ひとへにし給ふともきこえず」と、俊頼が必ずしも連歌を全否定するとは言えないことを主張する。終りに、

〔10〕これは連歌のついでに、承りしことを申し侍るになむ。

（すべらぎの中第二「玉章」（上・一九五頁））

と、長々と俊頼の連歌親について語った話を締め括る。俊頼の連歌を語ったついでに、人から聞いていたことを申しただけと、老嫗は（伝承）から得られた詩歌をめぐる話を語るといふ姿勢は崩さないのである。

二 （伝承）される事々

さて、『今鏡』で語られる（伝承）は、前項で述べた詩歌のほかにも多方面にわたっている。

すべらぎの中第二「白河の花の宴」は章段名からも窺えるように、白河院・鳥羽院・待賢門院、三院がそろって法勝寺・白河殿などに御幸されたこと、その後に催された和歌会のことと語られている。

前掲した〔4〕には三院が行幸された法勝寺の桜花の見事な景観が記されている。傍線部④「伝へ承りしだに、思ひやられ侍りき。まして見給へりけむ人こそ思ひやられ侍れ」と述べているように、その際の御幸の様子に関する情報は伝聞によって入手したのである。

〔1〕かくて年経て後、帰り上り給へるに、二条の帝、琵琶を好ませ給ひて召しければ、参り給ひて、賀王といふ楽ぞ弾き給ひけると伝へ承る。（ふちなみの中第五「飾太刀」（上・五五四頁））

藤原師長は保元の乱で父頼長に連座して土佐の国に配流された。

八年間の流謫を経て、帰京後初めて二条帝に召されて、賀王という曲を弾いた話が右記〔1〕の条である。『今鏡』の（伝承）に対する熱い視線のこと、語られる（伝承）の内容については、すでに前稿で論じた。（伝承）を語る手法として『今鏡』は伝聞表現を多用していると思われる。〔1〕で記された師長の話も伝聞表現「……と伝へ承る」が用いられている。

師長の琵琶について、『今鏡』は、

〔12〕琵琶こそ優れ給へりときこえ給ひしか、箏の琴をもかくきはめさせ給ひて、御祖父のあとつがせ給ふ、いとやさしくこそ

承り侍れ。（ふちなみの中第五「飾太刀」（上・五四九頁））

と、その優れた能力を述べている。ここでも「承り侍れ」と伝聞表

現を用いている。

さて、「飾太刀」章段は頼長の学問、性格、そして兄忠通との対立、保元の乱で敗れて死ぬことなど、頼長を中心に語るが、章段の最後で、『今鏡』に一貫する叙述方法で、頼長の子息たちのことが語られている。特に師長の琵琶をめぐる話題が詳しく述べられている。前稿で（伝承）の内容について検討したところでも触れたのは、師長の琵琶秘曲「青海波」を伝授した話である。

「13」都わかれて土佐の国へおはしけるに、これもりとかいふ陪從御送りに参りける道にて、琴のえならぬ調へ伝へ給ふとて、

その文の奥に歌詠み給へりけるこそ、あはれに悲しく承りしか、
教へ置く形身を深くしのばなむ身は青海の波に流れぬ

とかやぞ聞き侍りし。青海はかの調への心なるべし。いと悲しくやさしく侍りけることかな。

（ふちなみの中第五「飾太刀」へ上・五四九頁）

この伝授の話を①「承りしか」、その際に詠まれた歌を②「聞き侍りし」と、伝聞表現を用いて語っている。また、

「14」唐土に、昔、嵇叔夜といひける人の琴の優れたる調べを、この世ならぬ人に伝へならひて、一人知れりけるを、袁孝尼とかいひける琴弾きの、あながちにはらむといひけれども、ないがしろに思ひて許さざりけるほどに、罪を蒙りける時は、この調べの永く絶えぬことをこそ悲しむべし。この琴の調べを伝へ給ひむこそ、かしこく頼もしくも承りしか。

（ふちなみの中第五「飾太刀」へ上・五四九頁）

比較する先例として挙げられる中国の嵇康が秘曲を絶やしてしまつた話も③「承りしか」と、同じく伝聞表現を用いている。

既に述べていたようにこの琵琶伝承の話は当時から広く世に知られていたようである。保元の乱後、土佐に流される師長はまだ十九才の若さである。「身の御才なども、幼くよりよき人にておはしますときこえ給ひき」という多才な師長が若齢で僻地に流されることは、あまりにも惜しく、同情されたに違いない。このように悲劇の貴公子のような師長の話は、当時の人々にとつて格好の話題になつたのであろう。

（伝承）される事柄は政治、和歌、芸能に止まらず、様々な事が語られる。例えば、

「15」仁和寺の女院の女御参りにや侍りけむ、御もののか、その夜になりておこらせ給ひて、にはかに大事におはしましたるに、この僧正折り申し給ひければ、ほどなくおこたらせ給ひて、御車に奉りて、出でさせ給ひにける後に、物つきに物うたせて居給へりけるこそ、いとめでたく侍りけれと伝へ承りしか。

（みこたち第八「源氏の御息所」へ下・二九〇頁）

と、仁和寺の女院待賢門院璋子に取り憑いた物の怪を、行尊僧正が退治した話が語られる。行尊は「名高き験者」とされ、院の護持僧ともなっていた。ふちなみの下第六「志賀のみそぎ」でも、生後まもなく気絶してしまつた第三皇子君仁親王を、生き返らせた行尊の

姿が見える。「15」はそのような行尊の強い験力を語るもう一つの話である。ここでも「と伝へ承りしか」と伝聞表現が用いられている。

以上、幾つもの例を挙げながら、『今鏡』では伝聞表現が実に多く用いられていることを述べてきた。また、その内容に関しても、前項で考察した詩歌のみならず、多岐にわたることが明らかであろう。この点に関しては、前稿と合わせてみれば、なおよく理解できる。

三 〈伝へ語る〉人々―情報発信者たちについて―

ところで、『今鏡』の語りは「伝へ聞き侍りし」や「伝へ承りし」などのような形で叙述を進めるほか、ときには「伝へ語り侍りし」や「語り侍りし」などのように、いわば情報発信者に視線を向ける叙述の方法も取っている。

「16」一の間とかいひて論議のことの由なども、かの村上の御時
のをぞ、塵ばかり引き変へたるやうなかりけるとぞ、聴聞しける人伝へ語り侍りし。

（すべらぎの上第一「黄金の御法」(上・九五頁)

「16」は治暦元年に高陽院で催された法華八講会について語る箇所である。「村上の御代の水茎の跡を流れ汲ませ給ふ」と述べているように、この高陽院八講は村上天皇の時の法華八講を模範として行っていたようである。傍線部「聴聞しける人伝へ語り侍りし」とあるように、この八講の様子は(聴聞しける人)によって知りえたようである。すなわち、実際に高陽院御八講を聴講した人が情報発信者

になるのである。

さて、転々として語られてきた事柄は果たしてどれぐらい信憑性があるのだろうか。

「17」僻ごと¹にや侍らむ、人の伝へ語り侍りしなり。

(ふぢなみの中第五「御笠の松」(上・四八八頁))

「17」では、忠実が忠通の母である師子と結婚する経緯が語られている。忠実が師子に恋し、白河院の許しを得て師子をもらった話について、『今鏡』は「僻ごと¹にや侍らむ」と、その信憑性を疑うが、「人の伝へ語り侍りしなり」と、人がそのように伝へ語ったことにする。すなわち、真実かどうかは確かでないが、人々が話したことなのでひとまず語るのである。(伝承)の真髄はここにあるのである。人から人へ話が伝わって、信憑性が疑わしい僻事と思つても、(伝承)していくわけである。

「18」折節いとやさしく侍りけることかな」とこそ伝へ承りし
か。僻事にや侍りけむ、人の伝へ語り侍りし事は知りがたくぞ
傳る。

(ふぢなみの中第五「使合」(上・五三三頁))

「18」は兵衛佐を寵愛するようになってから、后聖子のところに渡御することもまれになった崇徳帝が、たまたま聖子のもとに渡った時、白い重桂の袖口を、波が立っているようにみえると言ったところ、聖子が「うらみぬ袖にもや」と、古歌を用いて悶怨をそれとなく訴えたというのである。傍線部「とこそ伝へ承りしか」からわかるように、この話も人づてに聞き得たもので、この話に対して、波

線部「僻事にや侍りけむ」とあるように真偽を疑っている。が、「人の伝へ語り侍りし事は知りがたくぞ侍る」と述べているように、たとえ信憑性が疑わしくても、真偽のほどはつきとめ得ぬのである。

では、情報発信者はどのような人々がいるのであろう。(稿末の表を参照)「人」「見たる人」「聴聞しける人」「聞く人」「女房」「ある人」「僧」「老いたる法師」などのように限定できないのも少なくないが、「定信の君」「盛通」「実宗」「隆資」などのように実名を示したのも多々ある。これら実名で示された情報発信者から『今鏡』の(伝承)の経路の一端を浮かび上がることができよう。

四 伝聞表現による『今鏡』の叙述態度

以上、『今鏡』で用いられる伝聞表現を見てきた。このような性格は、同じ鏡物の『大鏡』『増鏡』と比べてみることで、なお顕著に示されよう。例えば、『大鏡』『基経』伝では、基経の死去を悼む二首の歌が紹介されるとき、

「19」おとどつせたまひて、深草山にをさめたてまつる夜、勝延僧都のよみたまふ、

うつせみはからを見つとも思めつ深草の山煙だに立て
また、上野峯雄と言ひし人のよみたる、

深草の野辺の桜し心あらは今年ばかりは墨染に咲け
などは、古今にはべることもぞかしな。

傍線部「古今にはべることもぞかしな」と強めの語り口調で、こ

の二首の歌が『古今集』に収められていることを語っていた。二百年近い老人の語り手世継は得意げな語りで物語を進めていく。前述した「4」の傍線部②「新院、御製など集に入り侍るとかや」というような『今鏡』の語りとの違いは明らかであろう。

すでに序において『今鏡』の記述は伝聞によって行くと、明かされることは「1」と「2」からもわかる。では、なぜ『今鏡』の叙述は伝聞表現を多用するのであろうか。語り手の老嫗という設定と関わってくると思われる。

「20」もとは都に百年あまり侍りて、その後山城の狛のわたりに五十年ばかり侍りき。さて後思ひかけぬ草のゆかりに、春日野わたりに住み侍るなり。すみかの、となりかくなりし侍るもあはれに…

(序(上)・一〇頁)

『今鏡』の序文では、語り手の老嫗の年を明言していなかったが、都に百余年、山城の狛に五十年ばかり住んだことから、老嫗が百五十歳を超えているとわかる。老嫗の伝聞は、

「21」ただ養ひて侍る五節命婦とて侍りし、内わたりのことも語り、世の事も暗からず申して、琴のつま鳴らしなどして聞かせ侍るも、齢のぶる心地し侍りし。早くかくれ侍りて、又殿守のみやつこなる男の侍るも、初冠させ侍りしまで養ひたてて、この春日の里にも忘れずまうで来るが、朝ぎよめ御垣の内につきかうまつるにつけて、この世の事も聞き侍り。

(序(上)・一八頁)

波線部A娘と波線部B息子に大いに頼っていることを序文でも明言している。後一条天皇の万寿二年（一〇二五）から高倉天皇の嘉応二年（一一七〇）までの一四六年間のことを語る『今鏡』であるが、このように、昔の世に関する事柄は、自らの宮仕えの体験から得られた情報であり、年老いて隠居してからの近き世のことは娘と息子から得たものである、と（伝承）を語る方法を合理化している。

女性である老嫗という語り手の設定と伝聞表現で用いられた叙述によつて、『今鏡』の語りは『大鏡』のような強気な語りと異なるといえよう。このような語りの傾向が『増鏡』にも見出される。同じく語り手を女性の老尼に設定する『増鏡』では、『今鏡』ほどの伝聞表現はないが、「とかや」のような伝聞表現も多く用いられたことは既に注（4）に触れた。女性の語り手と伝聞表現と合わせることにより柔らかな語りが生じており、『今鏡』ほど伝聞表現を多く用いられると、語りを和らげることには止まらず、客観性も持たされるのである。

最後に、伝聞表現を多用する『今鏡』の叙述態度の所以について作者といわれる寂超との関連から私見を述べてみたい。

寂超が実際に周囲から得た伝聞をそのままに書き記したという考え方はすでに加納重文氏¹⁾によつて提示された。確かに寂超の受領階級という身分からも、三十代という若さで出家したという状況からも、いづれも加納氏の指摘を頷くことができる。が、それに加えて、『今鏡』を執筆した嘉応二年（一一七〇）頃、寂超はすでに五十代

後半ないし六十代前半になることも、こうした叙述態度に反映されていると考えられないだろうか。また、この経歴と、前半は都で、後半は山城の狛や春日野に隠棲している語り手の老嫗という設定との関係も興味深いものがあるが後考を待ちたい。

おわりに

前稿と合わせてみると、なぜ『今鏡』が（伝承）に対して熱い視線を注ぐのかもわかるようになるであろう。すなわち、（伝承）を重んじるため、自然様々な（伝承）に関する事柄に関心を傾け、自ら（伝承）を伝える一員になろうとしたと思われる。

〔注〕

（1）この傾向については、すでに加納重文氏「今鏡の和歌」（『秋田語文』二号、一九七二年十二月）、『歴史物語の思想』（一九九二年）所収、大木正義氏「第一章 芸文韻事と栄えの叙述」第一節 伝ふ」（『今鏡の表現論考』（一九九七年、新典社）、同氏「聞く」内容の卓立をめぐって—今鏡の資料入手法の一特色—」（『今鏡の表現世界』（一九九三年、新典社））、両氏によつて指摘されている。大木氏は、『大鏡』の序、

年頃、昔の人に對面して、いかで世の中の見聞くことをも聞
「こえあはせむ」
（『大鏡』「序」一三頁）

と、『増鏡』の序、

若かりし世に見聞き侍し事は…『増鏡』「序」二四八頁)

を挙げ、『大鏡』の世継翁と『増鏡』の老尼の語りが見聞くことによると指摘している。

この傾向を認めながら、前稿と本稿において、さらに細かく調査・分析を行い、(伝承)に重点を置く理由と伝聞表現での語りの理由を探ってみる。

(2) 拙稿『今鏡』独自の精神—(伝承)を重んじる心—(『古代中世国文学』第二十号、二〇〇三年十二月)

(3) 前掲注(1)加納氏の論文。

(4) 大木正義氏「とかや」小考—大鏡・今鏡の使用状況をめぐって—

—(『解釈』二二三四、一九七七年四月)は、『今鏡』が『大鏡』と比べて「とかや」表現を多用していることを指摘し、『今鏡』の表現は控えめであるとしているが、その理由については述べていなかった。

(5) 『私家集大成』(一九八三年、明治書院)の解説によると、現存する『忠盛集』の伝本では、流布本系が三十八首、異本系が百七十首ないし百九十首の両系統に分かれる。「またも来む：」歌は異本系(一三九番)に所収されている。

(6) 海野泰男氏『今鏡全釈』(一九八三年、福武書店)の「語釈」に、『日本記略』長元六年九月九日条に「重陽宴。題云。菊花似寿星。序資業。」という記事を示し、この時のことであろうと指摘しているが、なお限定することには慎重でありたい。

(7) 『今鏡全釈』の底本になる畠山本では「長元二年」とあるが、『扶桑略記』などの古記録の記述から、蓬左文庫本の「長久二年」の方が正しいと思われる。長久二年と考えて論を進める。

(8) 「桂を折る試み」という漢詩の催しは、すべらぎの上第一「雲居」でも「廿二日に上東門院に行幸ありて、桂を折る試みせさせ給ふ。題、「霜を経て菊の性を知る」、また「翠の松色を改むることなし」などぞきこえ侍りし。太政大臣奉らせ給へるとなむ」と語られている。

(9) 『今鏡全釈』は句点を付けているが、文脈上から考えて説点に改めた方がよいと思われる。

(10) 『今鏡全釈』では「驚かすを」とほのかに…とあるが、文脈上から考えて「驚かすをと(音)ほのかに…」に改めた方がよいと思われる。

(11) 『今鏡全釈』では「琵琶こそ優れ給へりときこえ給ひしが」とあるが、学術文庫『今鏡全釈注』(竹鼻績氏、一九八四、講談社)では「琵琶こそすぐれ給へりと聞え給へりしか」とある。『今鏡全釈』の方が誤りか。学術文庫『今鏡全釈注』に従って改める。

(12) 『今鏡全釈』では「いとやさしく承り侍れ」とあるが、学術文庫『今鏡全釈注』では「いとやさしくこそうけたまはり侍れ」とある。『今鏡全釈』の底本になる畠山本の方が誤りか。学術文庫『今鏡全釈注』に従って改める。

(13) 『今鏡全釈』では読点を付けているが、学術文庫『今鏡全訳注』

では句点を付けている。文脈上から考えてここで学術文庫『今鏡全訳注』に従って句点に改める。

(14) 前掲注(一)加納氏の論文。これらの人物については更に調査の必要があると思われる。調査の結果によって、作者周辺の人物、いわゆる常磐歌壇も判明してくるのであろう。機会を改めて考察したい。

(15) 同じ歴史物語の『栄花物語』に関しては、語り手を設ける他の四作品とは叙述形式が違うため、今回比較対象から除く。『榮

花物語』との比較は別の機会に譲りたい。

(16) 前掲注(一)加納氏の論文。

※本文の引用は、『今鏡全釈』(海野泰男氏、一九八三年、福武書店)、『大鏡』(新編日本古典文学全集(楳健二、加藤静子校注・訳、一九六六年、小学館)、『増鏡』(日本古典文学大系(時枝誠記ほか校注、一九六五年、岩波書店)による。引用末尾の(一)内に巻名・頁数の順に記す。なお、傍線、波線は私に付した。

——チエン・ウエンヤオ、広島大学大学院博士課程後期在学——

表

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	巻名	章段名	当該表現	情報発信者
										すべらぎの上第一	子の日	とか人の語り侍りし	人
										黄金の御法		とぞ、聴聞しける人伝へ語り侍りし。	聴聞した人
										波の上の杯		とぞ、定信の君は人に語られける	藤原定信
										ふちなみの上第四	宇治の川瀬	とぞ女房語られける	女房
											御笠の松	僻ごとによ侍らむ、人の伝へ語り侍りしなり。	人
											使合	僻事にや侍りけむ、人の伝へ語り侍りし事は知りがたくぞはべる。	人
											飾太刀	…と、人は語り侍りし	人
											苔の衣	これはこと人の語り侍りしなり	別の人
											水茎	…と、定信の君、人に語られける	藤原定信

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
		うちぎぎ第十			むかしがたり第九			みこたち第八			むらかみの源氏第七			ふちなみの下第六				
		敷島の打聞			賢き道々		折る験	月の隠るる山のは	花のあるじ	夢のかよひ路	うたたね	宮城野	花散る庭の面	ますみの影	雁がね			
		その事、刑部卿とか人の語られ侍りしに、侍従の大納言と申す人も侍りし。さ らばいと理なるべし	…とぞ語りける。聞きける男は、盛家といひし人とかや。	見たる人の語り侍りし、いとあはれにゆかしく。	この事は、その人の子の仲正といひしが語り侍りけるとなむ。 とぞ、武蔵の入道隆資と申すは、語り侍りける。	かにもおほえ侍らず。	老いたる法師の伝へ語り侍りしを、他所にて伝へ聞き侍りかば、おぼつかなく 侍り。「いづれの歌をぞ申すべけれども」など、語り侍りしかども、忘れて確 かにもおほえ侍らず。	あさましき事を聞きたりしとぞ語りける。	…とぞ。その流れの人の、才も位も、高くおはせし人の語られ侍りける。	…とぞ。その流れる山のは	…と人の語り侍りし。	…と人の語り侍りし。	…とぞ。盛重が子の盛通といふは語りけるとなむ	…とぞ。盛重が子の盛通といふは語りけるとなむ	見まゐらせたる人の、語りけるとなむ	…とぞ、語りけるとなむ。	人の語り侍りしは	…とぞ、語りけるとなむ。
	人	盛家	見たる人	藤原隆資	源仲正		藤原実宗	藤原有国の子孫	越後の乳母	人	人	某僧	藤原盛通	人	某中納言	人	藤原顕業	藤原定信